

子どもの活動をほめる・認める 「一芸に秀でる教育の推進」

地域の
特色ある
活動

～すべての子どもと地域の未来をはぐくみ、
ささえ、つなぐ「教育のまち大村」～

長崎県大村市教育委員会

1 はじめに

長崎県本土のほぼ中央部に位置する大村市は、空の玄関口である長崎空港、市内を南北に貫く長崎自動車道があり、令和4年9月23日に西九州新幹線が開業し、所謂「交通の三種の神器」が揃った全国でも珍しい都市です。また、1970年以降50年以上、県内唯一人口が増加し続ける市で、今後も9,000人超の学齢児童生徒数を維持する見込みです。令和元年10月に開館した「ミライ on」は、収蔵能力202万冊の県立・市立一体型「ミライ on 図書館」と「大村市歴史資料館」の複合施設であり、人々が集う知の拠点となっています。

およそ400年前、日本最初のキリシタン大名であり第18代領主の大村純忠公は、外国との交易の重要性を解し、領内の長崎港等をいち早く開港して南蛮貿易に注力したほか、ローマへ天正遣欧少年使節団を派遣し、当時最高の技術や知識を持ち帰らせるなど、先見の明がある大名でした。また、長与専斎（日本近代医学の祖）や楠本正隆（第3～5代衆議院議長）、長岡半太郎（世界的物理学者）らを輩出した藩校「五教館」を早くから設け、身分を問わず藩内の子どもの入学を許すなど、当時としては画期的な教育を行いました。このような土壌があるため、石井筆子（女性教育、知的障がい福祉の先駆者）、荒木十畝（近代日本画壇の牽引者）らを大村藩から後続輩出しています。さらには、「寿古踊」と令和4年11月にユネスコ無形文化遺産に

登録された「沖田踊」「黒丸踊」を合わせた「大村の郡三踊」を始めとする郷土芸能の伝承に地域と学校が連携して取り組んでいます。

2 「オールおおむら」で進める学校教育

予測困難で先が見えない時代の到来が見え隠れする現在、市内全15小学校、6中学校の校長の舵取りもいよいよ難しくなっています。

市教委では、学校の独自性を担保しつつ、統一できることは統一して学校の足並みを揃えることで、学校経営を支援しています。本稿では、その中から2つの取組を紹介します。

(1) ミライへつなぐ学校教育プロジェクト



令和4年6月2日号 大村市教育委員会

令和4年度から開始した「未来へつなぐ学校教育プロジェクト」
についてお知らせします。

**多様な人たちが互いを認め合うとともに、それぞれの持ち味を発揮して
生き生きと活躍し、皆が温かく包み込まれる社会をめざして**

近年、DEI（ダイバーシティ、イクイティ、インクルージョン）という考え方が広がっています。人それぞれの違いを認めるダイバーシティと、全ての人を対象として受け入れるインクルージョンを考え方の基礎に置き、一人一人スタート地点が異なるからこそ、個人に合った（異なる）支援を行うという公平性がある社会です。そして、そのような社会の担い手となる子供たちの学校教育環境も DEI の考えに基づいて見直していきます。

「未来へつなぐ学校教育プロジェクト」は、その見直しを行う3つのプロジェクトから成っています。

3つのプロジェクト

学校規模の適正化

○学校規模の適正化を図ることで、市内のどの学校に通学しても同水準の教育を受けることができるようになります。また、各学校の教育の質の向上につなげます。○学校を核とした地域コミュニティの活性化につなげます。

背景・現状

▲市内には県内最大の大規模校から極小規模校まで存在しており、適正規模の学校と同水準の教育活動が行いにくくなっています。

中学校統一型制服の導入

○性差によらない新しい標準服を導入することで、受容性の高い学校環境を作ります。○学校間の価格差を是正します。○リユース（再利用）を促進します。○広く意見を求めながら検討し、ふるさと大村を愛する心の育成につなげます。

背景・現状

▲市内の中学校の制服は、男女の性別によって指定されています。▲セーラーやスカートは、冬場の体温調節を難しくしています。▲学校間の価格差が最大1万円程度あります。

自信を持たせる学習評価の実施

○子供たちが自信を持つような学習評価の方法を研究します。★☆☆☆☆
○通知表にみられる評価（○、空欄、△）や評定（5、4、3、2、1）を判定する基準などを市内でできる限りそろえることで、学習評価の客観性と信頼性が保たれるようになります。

背景・現状

▲目標に基づく評価の考え方や、発達障害や不登校の子供の評価の在り方が、未だ十分浸透しているとは言えない状況です。▲評価の基準が異なるために、通う学校によって評価が異なる事例があります。

	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
学校規模	有識者会議、方針検討	方針決定、検討委員会等	周知説明会、移行準備	移行&検証
統一型制服	検討委員会、方針決定	新制服決定、説明会、販売	導入&検証	
学習評価	教員チームによる研究	実施&実践研究・改善		

本プロジェクトは、令和4～6年度の3か年に3つのプロジェクトで開始し、市内のどの学校に通学しても同水準の教育が受けられるようにするとともに、可能な限り個に対応できる体制づくりを目指しています。

①学校規模の適正化

本市の小学校は、児童数21名の完全複式極小規模校から1,058名の県内最大規模校まであります。また、26学級の大規模校を含む6中学校に約3,000名の生徒が在籍しています。これらの学校の適正化は、各々の規模のよさを最大限に生かし、課題を最小限に抑える方策を検討することとし、安易に統廃合を行わない方針で進めています。

②中学校統一型制服の導入

令和6年度開始を目指して、性差によって指定されることのない新制服の制定を進めています。これは時代の要請であるとともに、学校による価格差の是正や、オールおむらの意識の高揚にも資するものです。また、生徒数の増減や特色ある教育活動の実施に柔軟に対応できるよう、様々な理由による指定校変更を行いやすくするものです。

③自信をもたせる学習評価の実施

観点別学習状況評価が3観点になるなど、大きく変わった学習評価の考えを各教員に根付かせるとともに、評価の客観性や公正性を強化することを念頭に、市内教務主任による研究を深めています。評価は指導と一体となって、子どものよさを見取り、不十分な点があればその改善のためにフォローアップを行って子どもを励まし、自信を持たせる営みであることを再度確認しています。今後は、学校間の評価結果の差を是正する取組に着手する予定です。

(2) 特別支援教育の視点からの不登校対策

①公的な第三の居場所づくり

令和3年度に年間30日以上欠席した小学生は100人超、中学生は50人超であり、学校は未然防止や初期対応に特に注力していますが、価値観の多様化等様々な状況が相まって、学校の働きかけに限界があるケースがあ

ります。市教委では、誰ともつながっていない児童生徒が家を一步踏み出す契機にしてほしいとの思いで、令和2年度から公的な第三の居場所としてconne（コンネ）を開設しています。行きたいと思った時に通所し、自分がやりたいことをして過ごす場所です。令和4年12月現在で、小学生約20名、中学生約30名が登録し、毎日30名前後が利用しています。

②専門医からの助言

本市では平成28年度から市医師会の協力のもと、市内の精神科医5名を各中学校区に月1回派遣する「メンタルケア・アドバイザー医派遣事業」を行っています。発達障害等の特別な教育的支援を必要とする児童生徒に係る校内委員会への出席・助言、担任教員の電話相談への対応、校内研修会の講師を業務内容とし、専門的知見から学校の直接支援を行っています。

3 おわりに

「ミライ on」の名前には「未来の自分を育てるためのスイッチをonにできる場所」との願いが込められています。すべての子どもが、教科等の学習内容だけでなく、スポーツや文化・伝統芸能など、興味あることに打ち込み、自分を育てる。本市では、大人がそのようなまなざしで、「一芸に秀でる教育」を“はぐくみ”、一人一人の子どもを“ささえる”ことをお願いしています。そして、小さな目標を達成する度に、ほめる・認めることで、自己肯定感や自己有用感が心の中にしっかり生まれ、新たな目標や挑戦に“つながる”ものと考えます。認められた子どもが嬉しい日々を過ごし、その思いが学校や地域を明るく変えてくれることを心から期待しています。



教育長
遠藤 雅己